

# Tokai Fubokon Letter

シリーズ「知りたい! 隣の地域懇」

## 瀬戸尾張旭 新歓<4/25>

瀬戸尾張旭の新入生歓迎会が尾張旭のスカイワード旭にて開催されました。コロナ禍とはいえ、隣の公園では多くのマスク姿の家族が遊ぶ晴天でした。

地域の担当の高校社会科の紺野一弘先生、ゲストに高校英語科の堀口陽平先生、OBの名古屋大学理学部一年のHさんにご参加いただきました。

紺野先生からは、東海中高父母懇談会の「一人ばっちの父母を作らない」をモットーにした、楽しい瀬戸尾張旭の活動内容や署名活動の意義をユーモラスかつ情熱的にお話いただきました。

堀口先生からは昨年度の高3担任として、新しく始まった大学入学共通テストへの対策から、英語科として東海中高が六年間でしていくことなど、まだまだ大学受験について何も分からない中学の親御さんから不安に駆られる高校の親御さんにまで分かりやすくお話くださいました。そして、「受験は最後の最後まで諦めない。」と、力強いお言葉をいただきました。

OBのHさんのお話は現役と浪人時の自分の違いについて、目指す学校によつての具体的な対策の違い、そして家族の対応へのお願いでした。「何も言わずに待っていて欲しい」と。東海のお母様方は息子大好きお母様だと思しますので、これはなかなか大変なことです。この言葉は毎年OBの方のお話を伺うと皆さん言われますので、とても大切なことのようにです。

講演の後は学年別に先生方に入っていたき分散会を行いました。どこの学年も話がつきず、時間もあ



過去の地域懇

つという間に過ぎて、終了後も和気あいあいと話してみえました。特に新入生のお母

様同士の距離も縮まったのではないのでしょうか。

親御さんから、昨年から学校行事もことごとく中止となり学校が分からない、という不安の声をお聞きました。皆さま笑顔ではありますが、まだまだ不安な状況なのだと感じました。そんな時こそ、父母懇を利用していただきたいです。先生と保護者、中学と高校、一年生と三年生。そんな垣根のない父母懇での会話でお母様方が笑顔になり、少しでも不安や疑問に思うことが解消されるのではと思います。そして多くの出逢いを母にくれた息子に今は感謝しています。



またこのような状況の中、細心の注意で準備していただいた幹事学年の皆さまには大変感謝しております。ありがとうございました。

## 特集 第1回文化講座

～保護者と読む漱石の「こころ」～

赤川 航紀 先生(高校国語科)

7月16日(金)に父母懇主催の今年度第1回文化講座を行います。それに先立ちまして、現在高3の担任と中2の国語を担当している、講師の赤川航紀先生に、経歴や先生として普段考えていること、そして今回の講座のポイントを伺ってきました。

### 一ご出身は?

東京出身。麻布中高から東大、大学院まで。専攻はイタリア文学(ダンテなど)で半年ほど留学も経験。東海は6年目。名古屋へは就職試験で初めて降り立った。大学に東海出身者がいて、麻布に似ていると聞いて知っていた。縁あって東海に就職し、職場の近くに住める名古屋の環境はありがたいが、本屋が少な

いのが唯一の不満。

中高ではオリエンテーリング部(東海のワンゲル部と同じ)。大学でも続けたかったがチャラク感じて断念。学生は勉強が本分という意識を強く持ちすぎ、バイトやサークル活動がないがしろにしたことを後悔している。卒業生には勉強も楽しみも全部やれ!!と伝えている。



神戸出身の母の影響で宝塚ファン。カヅラカタに興味があると履歴書に書いたのはウケが良かったようで、現在当然のごとくカヅラカタの顧問。

### 一イタリア文学に興味を持ったきっかけは?

両親と色々な国へ旅行したが、小5で訪れたイタリアはなんて素晴らしいんだと思った。まだ当時は街並みや都市のレベルで我々が持っている中世ヨーロッパのイメージがそのまま残っていた。イタリアの国民性として明るいイメージがあるが、文学をやっているようなインテリは逆にとびきり暗いのが自分には合っていた。

### 一どんなお子さんでしたか?

保育園の頃から何かに悩んでいるような、今にして思えば大人びた子どもだった。みんなの輪に入らず、「なぜ僕はみんなに混じれないのだろうか?」など色々なことを考えて庭をぐるぐる歩いていた。

今教師として自分と似たような生徒を見てみると、自分は嫌な奴だった、と思う。天邪鬼で硬派を気取って、「こころ」ばりに恋愛を罪悪視していた。自分に似たタイプ(みんなと一緒に楽しくやろう、とかは大嫌い)の生徒の気持ちはすぐ分かるが、明るいことに勝るものはないな、と今は生徒を見ていて思う。

第一印象でどう思われているかは分からないが、自分はとてもポジティブ。でもそういう自分が嫌だったから、逆に自分はこういう人間になるぞ、という人一倍強い自意識を中高生の時は作っていたように思う。親への反抗心ももちろんあった。

### 一読書の習慣は?

小さい頃からたくさん読んでいた。中学生の頃はいわゆる中2病だったのか「難しい本を読まなければ」と思っていた。今思えば全然理解していなかったのだ

が、「自分は人とは違う」だとか、自分を大人に見せるためのかぶれた読書をしていたからこそ今の自分があるように思う。「こころ」のような文学作品を読んできたのも、「そういう自分を理解してくれる過去の天才もいるはずだ」という前提に立っている。今の子供たちは「学校の勉強ができれば十分」という素直な勉強しかしないように思うし、自分を特別視したい気持ちをどのように昇華しているのかが気になっている。

### 一教師を目指したのは?

大学の先生への恩返し。大学での勉強はとても楽しかったが、大学の先生になれるほどではなかったので、大学の先生が教えがいのあるような学生を大学に送り出そうと思って、中高の教師を目指した。中には「中高生に第二外国語でラテン語を」と望む恩師がいて、その気持ちに答えるべく第二外国語研究会の顧問となり、イタリア語とラテン語を教えている。

### 一最近の興味関心は?

文系学問は人間とはなんだろうかを研究する。その中で心理学的アプローチが自分に合っていると思い、同僚の先生と読書会で心理学の本を読んでいる。今回の講座も心理学的アプローチが多くなると思う。

心理学を学ぶことで、生徒への理解にも役立っていると思う一方で、学んだことを自分の教育にそのまま取り入れたいとは思っていない。誰も自分のことを心理学的に見透かされていると思うのは嫌だから。

最近市民権を得てきた「陰キャ」。大抵はポジティブである自意識が、ネガティブな要素を自分のかけがえのない一部と考えてしまい、そのマイナス要素を言い訳に使って自分に閉じこもろうとする人、というのが心理学を学んだ僕の中の定義。負の意識を持ちつつ、それを手放せない感覚があるように思う。逆に「陽キャ」は自分の中のこだわりがない人。自意識の葛藤を感じない生粋の「陽キャ」は、授業で「こころ」を読んでも何も感じない場合もあるが、それはしょうがないと思う。



今回のチラシは  
週刊誌風!?

30を過ぎて一生の趣味をと思い、将棋と株の勉強を始めた。

### 一生徒に対しては？

生徒に対してもっと「こうでなきゃいけないんだ」とあえて頑迷に示してあげた方が良くなるのではないかと常日頃葛藤している。東海以上に自由な校風の出身だからかもしれないが、自分は物分かりが良すぎる部分がある。完全に自由にした方が生徒はより良く伸びていくと思うのだが、自由にさせるのはある意味冷たいとも思う。日本を支えていくエリートを育てていくにあたって、多少なりとも生徒には「こういう人間になるべきだ」という圧力をかけ、教員側もそういう人間を育てているんだという意識をもっと高めていけたら良いと思う。



### 一生徒の悩み

生徒の悩みの陰には、親からの期待に応えきれない自分を処理しきれないことがあって、それが色々な形で現れてくる。親からの命令が強ければ強いほど子どもは色々な形で反抗する。しかし応える気がないから反抗しているのではなく、応えたいのに応えられないから反抗している、と感じる。ただ、昨今は反抗期がない、弱いことは言われていて、それが今後の人生において影響があるかは分からない。

### 一東海生をみて

東海を目指すエリートは健康的でなんでも受け入れる真面目な感じ。文武両道を理想としている点も麻布と大きく違う。麻布はもっと個性で勝負していく感じで芸術とかで自分を表現するタイプも多い。

東海生の良さは一周回って変にかぶれてなくて、こっちの話を素直に聞いてくれること。

## 講座について

### 一なぜ「ころ」を選んだのか？

長年高校2年生で「山月記」「舞姫」「ころ」を現代文で読むことになっている。数年間教えてみて、一貫したもの、伝えたいものがあるということが臆げながら掴めてきた。

この講座でのポイントは二つ。一つは保護者の方

も学生時代に読んだ作品に今一度向き合ってみて、それを読む自分自身の発見をしてほしい。

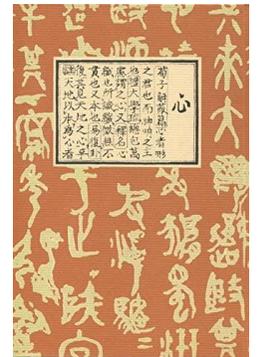
もう一つは自分の子供が何を学んでいるのか、同じ教材を通して知ってほしい。結構難しいところ、深いところまで読んでいる。生徒には自分勝手に読むのではなく、現代文としての読み方を学んでほしいと言うが、それを通り抜けた保護者の方々には、自分の関心に従って読んでいただければ良い。

### 一古典小説というのは鏡

一つの小説を読むにしても、若い人と人生経験を積んだ人とは見え方が違う。特に古典小説は自分というものが見えてくる。若い時には何に関心を持ったかでどんな人間なのかが分かり、歳をとって見え方が変わってくるとそういう関心を持っている自分を知ることを知る。例えば一読してもKが死ぬ理由なんてよく分からない。自分自身で考えてみた時に、こんなじゃないかな？と思うのは「ころ」がそういう描写をしているからと同時に、そう考えている自分がいるから。そう考える自分ってなんなのだろう？と自分に正直になって考えてみて欲しい。もしつまらないと思っても、それがなぜつまらないのかが今なら冷静に分析できると思う。

### 一大人になってから文学作品を読むには

自分が本当に興味関心を持っていることは何かを考えてみると良い。何も考えない人に文学は必要ないと思う。自分の幸せな気持ちを昔の人も抱いているはずだ、と思って文学を読む人なんていなくて、むしろ自分にやむに止まれない辛い悩みなどの気持ちをぶつけるためとも言える。人生に悩んで、その苦しみに対してすぐさま答えが欲しいのだったら、占いとかにいけば良い。そういった苦しみを自分の中に受け止めて、それと付き合おうという気持ちの時には文学がいいかな、と思う。



「ころ」初版本表紙  
岩波書店(大正3年9月)

### 一夏目漱石について

おすすめは「それから」(日本文学の金字塔、高校生の時に読んで本当に感動した)と「夢十夜」(短編・シュールな内容)。

漱石の時代の背景として、近代がスタートした頃であり、近代とは自分で自分の在り方を決めて、それまでの身分が決まっていた時代から、なりたい自分になっていく時代へと変わっていく頃だった。自分で自分のことを決められるが、本当の自分ってなんだろうって考えた時に、こうでありたい、こうじゃないかと思っていた自分が本当の自分でなかったことを最後に知るのが「こころ」のテーマ。

「こころ」を含む後期3部作は一貫したテーマがあり、人って孤独、他人の気持ちなんか分からないし、ましてや自分のことも自分で分からないってことを近代の初めから悩み抜いているのが漱石。

ヨーロッパからやってきた近代という考え方が、全然日本に根付いてないというところから色んな苦しみが生きているというのが、夏目漱石前期の作品。後期は自分が近代的な人間として生きていくのはすごく大変で無理だ、ということに悩むという話になっていく。

## —最後に

大人向けの講座なので、子供以上にごまかしがきかないと思っている。自分も授業でやることを改めて考え直してみる良い機会となった。

---

## 今後の掲載予定

- ・新代表挨拶
- ・前父母代表の卒業メッセージ

### 編集後記

春の新歓が行えたのは2地域でしたが、充実した会だったのが分かります。秋の地域懇開催を願ってやみません。

赤川先生のインタビューは「こころ」を読んでから臨んだのですが、まさに改めて自分の内面に出会う機会を得られたように感じ、もう一度、そしてまたいつか読んでみようと思いました。赤川先生は都会的でどこかかげがあってミステリアスな雰囲気があるのに、ツカファンでイタリア好き。さすが国語の先生、説明の説得力、例え話の瞬発力は抜群で、ここには書ききれない、たまに飛んでくる直球も可笑しくて、本当に洗練されています！